

ARCLE®



これから  
どのような  
英語教育が  
求められるのか

～言葉で「つながる」授業をつくる～

上智大学・ベネッセ英語教育シンポジウム報告書

SYMPOSIUM REPORT  
2020

ベネッセ教育総合研究所

## はじめに

この報告書は、2020年12月6日に開催した上智大学・ベネッセ英語教育シンポジウム「これからどのような英語教育が求められるのか～言葉で『つながる』授業をつくる～」の発表、議論の内容をまとめたものです。今回は初のオンライン開催となりましたが、全国各地や海外から教育現場の先生、研究者、学生、教育行政関係者など、多くの皆様にご参加いただきました。

第1部では、ARCLE理事の先生方の討論を通して、これから求められる英語教育についての考えを深めました。続く第2部では、オンデマンド型、オンラインによる同時双方向型、対面型(教室)の3パターンの授業の体験を通して、ハイブリッドな授業設計について具体的な方法の提案を行いました。これからの英語教育を考える資料として、ご活用いただければ幸いです。

ARCLE事務局

## 目次

	ページ
<b>第1部：討論</b>	
<b>これからどのような英語教育が求められるのか</b>	
発表者・登壇者：吉田 研作(上智大学) 田中 茂範(PEN言語教育サービス) 根岸 雅史(東京外国語大学) アレン玉井 光江(青山学院大学) 金森 強(文教大学)	1
<b>第2部：実践研究</b>	
<b>「つながる」英語の授業をつくる ～対面とオンラインで～</b>	
発表者：長沼 君主(東海大学) 工藤 洋路(玉川大学) 津久井 貴之(大妻中学高等学校)	12
<b>ARCLE理事・研究員からのメッセージ シンポジウムを終えて</b>	22
<b>参加者の声 「心に残った気づきや学び・これから取り組みたいこと」～参加者アンケートから～</b>	24

※シンポジウム当日の投影・配布資料はARCLEホームページ<http://www.arcle.jp/>に掲載しています。

# これからどのような 英語教育が求められるのか

これからどのような英語教育が求められるのか



第1部：討論（撮影会場）

発表者・登壇者：吉田 研作（上智大学）  
田中 茂範（PEN言語教育サービス）  
根岸 雅史（東京外国語大学）  
アレン玉井 光江（青山学院大学）  
金森 強（文教大学）

子どもたちが生きていくこれからの時代は、予測不可能なことが起こる時代ともいえます。そのような中で求められる英語教育とはどのようなもののでしょうか。今の大きな変化を捉え、これからの時代に英語教育を通して身につけてほしい力について議論を深めました。



田中 茂範 先生

根岸先生：第1部では、コロナ禍により一変したこの状況において、改めてどのような英語教育が求められるのかについて、田中先生、吉田先生にお話しいただき、それについてアレン先生、金森先生からご感想とご質問をいただきます。では、田中先生よりお願いします。

田中先生：大きなテーマですが、過去に何回も繰り返された問いであり、私自身が考えてきたことの概要をお話しできればと思います。

これまで私は、個人に求められる資質として、「たくましさ」と「しなやかさ」を言い続けてきました。「たくましさ」とは、自分で考え、判断し、行動するという自立(律)性です。「しなやかさ」とは、異なる人と向き合うために、自らの常識や意味空間を変えていく柔軟性です。英語教育において、「たくましさ」は自己表現力、「しなやかさ」は対話力であり、それらを育てていくことが求められています(図1-1)。

グローバル化とデジタルイゼーションが両輪を担う新しい時代において求められるのは、連帯、協働であると考えます(図1-2)。連帯は、コミュニケーションを通して可能となるもので、そこでは確かな英語力が求められます。これまでは、テストで高得

図1-1

## 個人に求められる資質

### ■たくましさ(自立[independence]・自律[autonomy])

自分で考え、判断し、行動するという自立(律)性

☞ 自己表現力

### ■しなやかさ(柔軟性[flexible, resilient])

異質の他者との共生のためには、自らの意味空間を変えていくしなやかさが必要

☞ 対話力

点を取れる生徒が、英語が得意だといわれてきましたが、それは確かな英語力とはいえません。これから求められるのは、生徒一人ひとりの中に息づく英語力、My English、個人に帰属する英語力を育てていくことです。これまでは、Adaptation Modelというネイティブのように英語を話せる正しさ、適切さが重要視されてきましたが、CEFRなどでは、Proficient-Language User Modelが英語力を語るモデルとして使われています。これは、文化が正しさを決めるのではなく、場面が決めるという見方で、世界中の人と様々な状況でやり取りをする調整能力が求められているということです。

CEFRには、Linguistic Competences、Sociolinguistic Competences、Pragmatic Competencesの3要素があり、Linguistic Competencesは、lexical、grammatical、semantic、phonologicalなどに分かれています。しかし、この分類的記述方法ではinteractionの部分が捉えきれず、トータルとしての能力は見えないという問題点があるため、今後は英語力の定義を相互作用型に変えていく必要があります。そこで本研究会(ARCLE)では、interactionの部分を捉えられるものとしてECFを開発しました

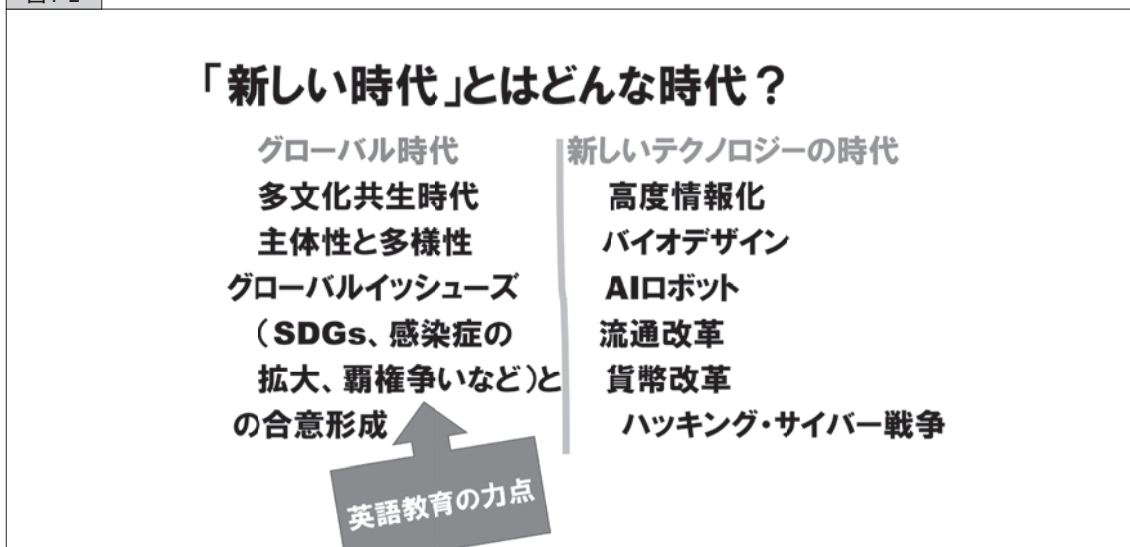
(P.4 図1-3)。ECFでは、タスク・ハンドリング(TASK-HANDLING)と言語リソース(LANGUAGE RESOURCES)が相互に関係し合うと捉え、タスク・ハンドリングを行うために、どのような言語リソースを使い、スキルをcompetenceに変え、actionに持っていきけるかを定義し、幼児から成人までの一貫した英語教育カリキュラム編成としてまとめています。

ECFでは、タスク・ハンドリングと言語リソースの言語的レパートリーが、個人の中に息づく英語、My Englishだと考え、そうした力の育成が英語教育の目標であることを明示化しています。

そして、コミュニケーションの能力はスパイラルに発達していくと捉え、それぞれの年齢ステージにおける言語世界で、典型的なタスクをどのような言語リソースを使って行うのかを、一貫した軸を持って、発達段階別に整理しています。言語リソースは語彙力・文法力・慣用表現力の3つで表し、語彙力は基本語力・拡張語力、文法力はチャンクの形成・チャンキング、慣用表現力は表現の型に分類しています。

Otto Jespersenは、言語には慣習と創造の2つの側面があり、自由表現と慣用表現が言語の

図1-2



両輪であると述べています。慣用表現を使う力を育てれば、自分の思いを効率よく表現できるようになり、英語表現の組み立てが容易になります。また、慣用表現を使うことができれば、会話の流れを自由に自己調整でき、慣用表現の連鎖がプレゼンテーションやチェアリングのスキルとなります。

ただし、タスクは無数に存在するため、個々のタスクをリストにしても、その場限りのものになってしまいます。抽象度を上げ、タスク・ハンドリング・スキル（事物描写力、概念説明力、発表力、対話力、交渉力など）に注目することが重要です。また、ねらい（目的）があるのはタスクであって、「話す」「書く」といった表現モード自体ではないことを自覚しておく必要があります。

英語力を育成するためには、教材開発と指導法と評価方法に一貫性、整合性がなくてはなりません。タスク・ハンドリングと言語リソースが目標設定の鍵となり、語彙力、文法力、慣用表現力を鍛える教材や様々なタスク・ハンドリングをカバーする教材の開発が必要です。指導法においては、Task-based Teaching、言語リソースを増やすLanguage-based Teaching、瞬発力や音声で表現する力を育てるOrality-based Teaching

も大事です。

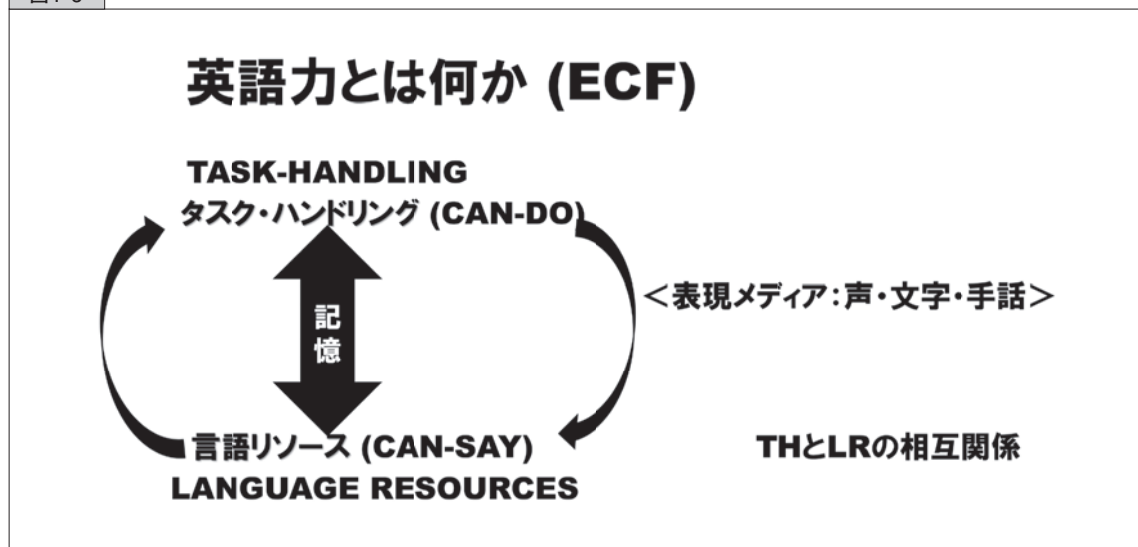
最後になりますが、「いつか、どこかで、誰かと話したい」ではなく、「今、ここで、あなたと話したい」という気持ちを醸成すること、つまり学習者であると同時に表現者でもあるという、Learning by doingを実践することが必要になります。語学教師は、しらけない場をつくるプロデューサーになることが重要なのです。本日はこれまで考えてきた概要部分をお伝えしました。

根岸先生：ありがとうございました。それでは、アレン先生からのご感想とご質問をお願いします。

アレン先生：この変動する21世紀だからこそ、言葉が大きな力をもつという田中先生のご発表に深く賛同いたします。

21世紀は新しいテクノロジーの時代ですが、世界には様々な問題が山積しており、公正、公平にならない現実には多くの人が苦しんでいます。このように不確実で目まぐるしく変化する現代において、OECD教育局は子どもたちが大人になる2030年頃にどのような能力獲得が必要で、教育はどのように変わるべきかについて、世界各国の教育機関、教育省、教育行政、教師や生徒などから声を聞き、議論を進めるためのEducation2030を、2015年

図1-3



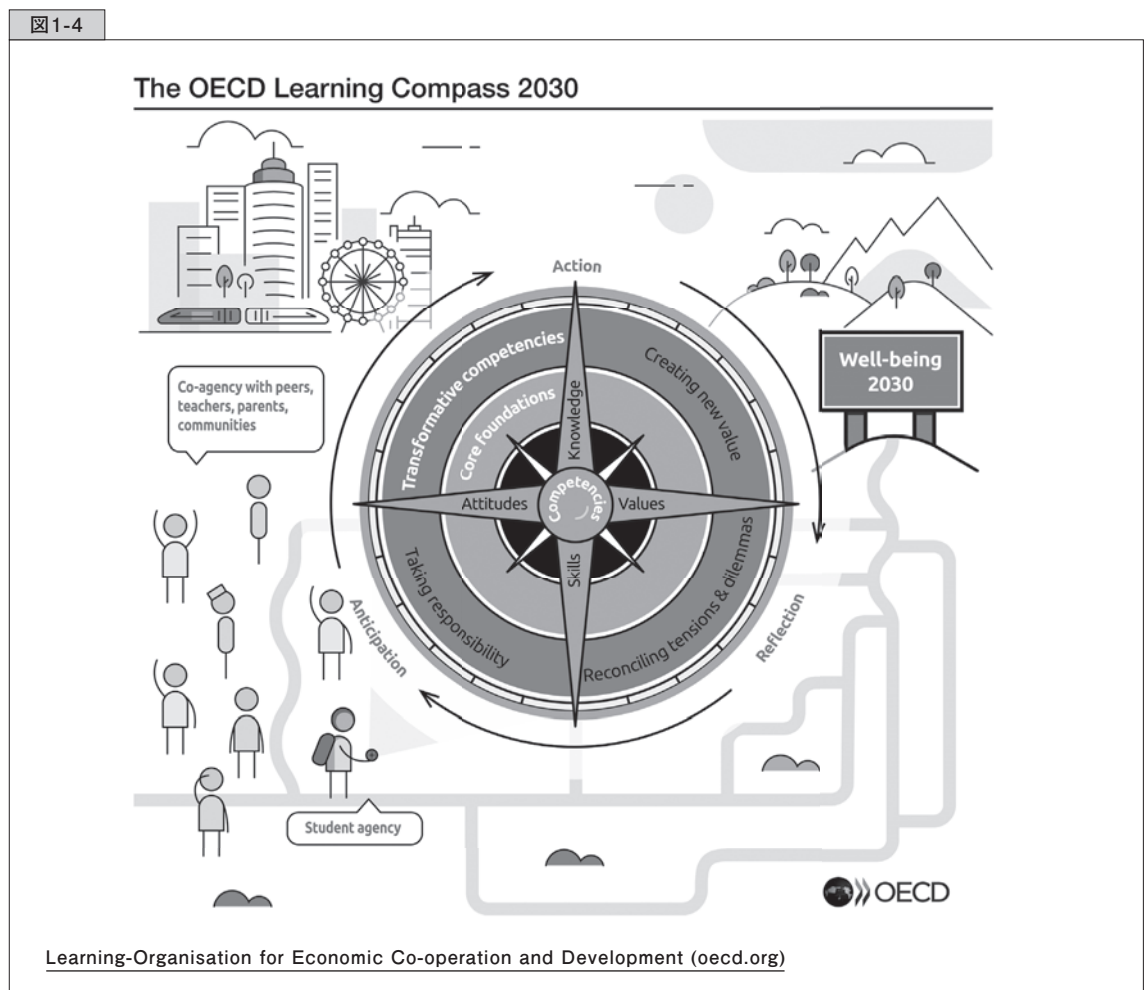
にスタートしました。Education2030は、日本においても学習指導要領の改訂に大きな影響を与えました。

次に、Education2030のLearning Compassをご紹介したいと思います(図1-4)。

学力は、Knowledge, Skills, Attitudes, Valuesの4つによって進みます。獲得した【知識】を実際の場面で使いこなす能力を【スキル】としています。それには「認知的またはメタ認知的スキル」、「社会的または情意的スキル」、そして「身体的または実践的スキル」という3つのスキルがありますが、私は「社会的または情意的スキル」に注目しています。このスキルには、共感する力、敬う力、他とつながる力があり、教室の中でも、活動を通し

て育てるべき力だといわれています。また、それらの力を読み取るために、忍耐、責任、好奇心、勇気等のスキルを評価することの重要性についても述べられています。

Education2030では、自分を含めた人々の幸せのためによりよい世界を構築することを願い、行動を起こせる人に成長できることを目標としています。このニューノーマルといわれる新しい教育観の中心にあるのは、学習者の主体性という考え方です。自分で目標を設定し、自らも振り返り、変化ができるように責任をもって動ける力、他者の選択に従うのではなく、自らの力で動き、自ら決断を下す学習者を育てることが必要だとしています。英語教育でも、学習者主体型の教育が必要であるといわれ、





アレン玉井 光江 先生

その試みが進められています。ここで田中先生に質問です。ニューノーマルといわれる英語教育を求めて、われわれ教師が知っておくべきこと、また覚えておくべきことをまとめていただけますか。

田中先生：Education2030の要諦は、agencyという概念とactionに表れています。知は、自分の頭の中にあるだけではなく外に出せること、つまり実践の知が重要です。プロジェクトは、ある目的に向かってみんなで取り組むことで、リサーチし、ディスカッションし、プレゼンテーションをする力につながります。リサーチによって、他者と向き合うこと、自分の持っている常識が通じないこと、相互にco-constructしていくことを学び、リサーチした

ことをディスカッションすることで、他者の意見を調整する力、自分の中に取り込む力がつき、魅力的なアイデアを生み出すことができます。critical thinkingや正確な評価をするためにディベートは重要ですし、ディスカッション、プレゼンテーションは自分の中にあるものを差し出す、究極の自己表現力だと考えます。限られた時間で自分のアイデアを魅力的に整理し、選び、プレゼンテーション・ディスカッション・リサーチの3つを円環させながら、結果を生み出すのがプロジェクトです。その結果が、sympathyやempathy、perseveranceを総合的に鍛えていくことにつながると考えます。

根岸先生：ありがとうございます。吉田先生にご発表をお願いします。

吉田先生：全体的な考え方は、田中先生と変わりませんが、コロナ禍で変わってきたこともあります。

“Fish Bowl Model”は20年くらい前に発表したモデルですが、それまでの英語教育は、金魚鉢にいる金魚と同じように、誰かが世話をしなければ学べない状況でした(図1-5)。教師は言語の形態を一生懸命教え、ネイティブの英語でなければ英

図1-5

## Fish Bowl Model

### 1. Reliance on Others

**Teacher-centered, passive learning**

### 2. Preservation of Ideal Environment

**Intolerance of errors**

**Use of ‘other’ models (native speaker)**

### 3. Isolation—Artificially Limited Environment

**Communication with outside not required**

**Applicable only to given environment**

語でないという発想であったため、授業で簡単な会話はできて、学習した英語は教室の外では役に立たない状態でした。21世紀に入り、グローバル人材育成、SEL-Hiプログラムなどが始まり、私は“Open Seas Model”を発表しました。これからは大海に出て、自らの力で生き、いろいろな体験をしながら、たくましく生きていける姿に変わっていく必要があることを示しています。言われたから学ぶのではなく、自らやってみようを探し、自分からいろいろなテーマにアタックしていけるLearner-centeredでありたいです。そして教師が生徒を助ける、カウンセラー的な役割に変わることで、生徒は自分の力で英語を学んでいけるようになります。生徒がネイティブの真似ではなく、自分の言いたいことを言おうとする、My Englishに近い考え方の英語を自ら開発し、それを使っていける手助けをしていきたいものです。コミュニケーションの大事さを進めることで、accuracyからacceptabilityへと変わり、文法の正しさに焦点を当てるのではなく、相手が伝えたかったことを受け止め、互いに意味の交渉をしながら通じ合うこと、



吉田 研作 先生

acceptableな言葉、外国語を学び、いろいろな価値観に触れながら、人間として育っていく時代の英語教育へと変わってきているのです。

Ikeda先生がまとめた、Types of L2/FL teaching approaches (2011)に沿って、日本の

英語教育を振り返りたいと思います (P.8図1-6)。これまでは、教室以外では英語は使わない、知識の蓄えを中心とした、教室で役立つ英語でした。structuralモデルがベースにあり、暗記や正しい文型の自動化を目指す、文型中心のシラバスだったため、教室では話せているのに、一歩外に出ると全然話せないケースがたくさんありました。1964年の東京オリンピック、1970年の日本万

## Open Seas Model

### 1. Reliance on Self

**Learner-centered, active learning**

### 2. Adaptation to existing environment

**Tolerance of mistakes & non-native forms**

**Acceptability & Diversity of values as norm**

### 3. Co-existence—naturally selected habitat

**Importance of cross-cultural understanding**

**Communicability in international setting**

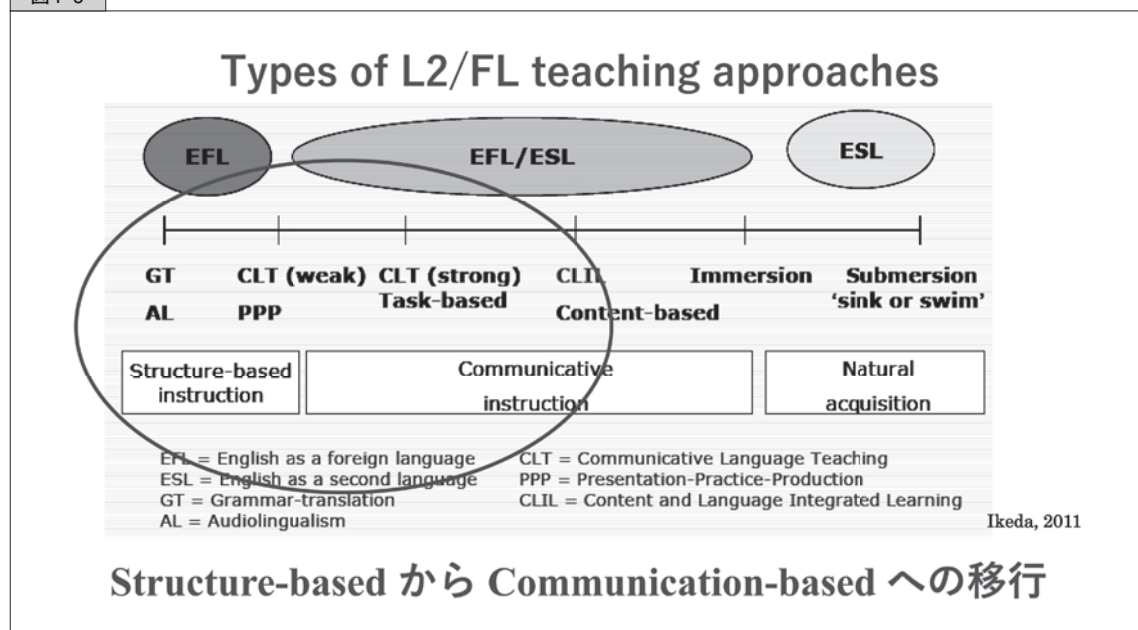
国博覧会で初めていろいろな国の人と接した日本人は、形だけを覚えているは駄目であることに気づき、1970年の学習指導要領に、「自己表現」、「理解すること」、「国際理解」という言葉が加わりました。これがコミュニケーションへの意識を膨らませ、Communicative Language Teaching (CLT)の導入へとつながりました。最初は文法を覚え、ドリルをし、できあがったら会話をするという構造を学ぶことからでしたが、Presentation-Practice-Production (PPP)、SLA (第二言語習得)の研究が1980年代から進み、タスクという言葉が重要性を増しました。言葉を使って何ができるようになればよいか、どのようなタスクを完成させればよいか重要となり、Task-basedカリキュラムへと変わっていきました。タスク達成に必要な linguistic resources とは何か、言語的リソースの重要性が意味をもつようになり、タスクを達成するために言語の形を覚える、focus on form の考え方へと移行していきます。それが進み、最近では、CLIL (Content and Language Integrated Learning) という考え方が導入されています。

コンテンツ中心の考え方へと変わり、Structure-based から Communication-based へと移行してきているのが現状です。

今回の学習指導要領は、CEFRの考え方をベースに日本の学習者がCEFRのどこに位置するのかを示し、能力レベル別に「何ができるか」をCAN-DOの表現で一覧化しています。自分の英語を使いながら、言いたいことを相手に伝えることができる力の大切さが、ここにも示されています。最終的には、国境もなく、いろいろな国の人たちが一緒になってSDGsの17ゴールに向けて話し、協働しながら問題の解決にあたっていける教育を目指していくことが大切だと思っています。

ニューノーマル時代の英語教育を考える際のモデルの1つとしてRichards & Rodgersを提示します(図1-7)。彼らは、Approach、Design、Procedureの3枠がなければMethodologyはできないという考え方です。Approachは、何のための英語や外国語で、どう学ばば学べるのだろうかという基本的な考え方であり、どんな時代であっても変わらない部分です。言語を学ぶために必要なこ

図1-6



とが分かれば、教え方が見えてきます。学習の進め方や言語の身につけ方を心理面からも考え、教師、生徒、教材の役割を考えたDesignが、カリキュラムやシラバスです。最も目的に適した形による具体的な教え方がProcedureですが、ここが今回、コロナ禍の影響を最も受けた部分でもあります。ポストコロナ時代に入った時、これまでとまったく同じ対面方式に戻ることはなく、これまでに試してきたオンライン、ハイブリッド型で身につけたことを生かしていく必要があります。私も自分の授業準備のためにたくさんのビデオを作りました。グループワーク、ペアワーク、他校との交流、他国との交流、遠隔でゲストを呼ぶことなど、いろいろな経験がオンラインにより可能になりました。これらを授業の中にどのように組み入れ、新しい授業を展開していくかを考えていくことが大切です。これまで反転授業の実現について多く語られてきましたが、コロナを機により具体的に考えることができ、可能性が広がりました。この1年は大変なこともありましたが、その経験を次の時代に生かしていきたいと思っています。

**根岸先生**：ありがとうございました。それでは、金森先生お願いします。

**金森先生**：吉田先生が指摘されたように、金魚鉢モデルが英語教育の一番の課題であり、このモデルから脱却しない限りは、必要な能力を与えることができないと私も考えます。大切なのは指導する側のマインド・リセットですが、教師を育てるという視点から考えた時に、私は動物園モデルという考え方を使っています。例えば、チンパンジーを育てる時、一生動物園で飼育する場合と森に返す場合とでは、育て方が違ってきます。指導する側がどこに向かって育てるのかを考え、身につけさせたい力や評価の情報をもっておく必要があります。そして、そこに信頼性、妥当性のあるテストがない限りは、その力を十分に測ることはできません。

GIGAスクール構想のおかげで、デジタル化が一気に進みました。デジタル教材が魅力的になれば、教える側のマインドも変わっていきます。個人で勉強できるデジタルコンテンツも必要ですが、学びの直接体験がある教室の中で活用でき、学びを深め、豊かにできるデジタルコンテンツこそが必

図1-7

### ニューノーマル時代の英語教育

**Approach:** *What is 'language'—what do we want our students to learn and acquire?*  
 : *How do we learn language(s)—first as well as second?*

→ *language = main purpose is communication  
 learned best through process of communication (meaningful and authentic tasks)*

**Design:** *What kind of curriculum should we use to realize the Approach?*

→ *CEFR (performance) criteria > Structural criteria  
 Content (e.g. CLIL) > learning 'about' language*

**Procedure:** *What kinds of teaching techniques should we use in our teaching?*

→ *Face-to-face, on-line, hybrid, etc.*

*Richards & Rodgers*



金森 強 先生

要なのではと考えています。

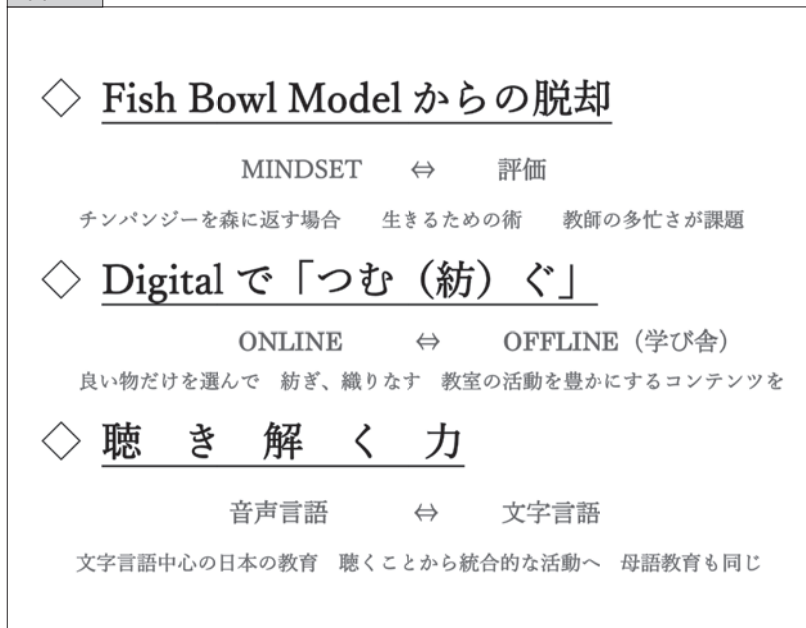
日本の教育は、どちらかというと文字言語による教育が多く、音声言語による教育は十分ではありません。実生活では、人の話を聞いて言ったことに対して反応して、自分の意見をその場で述べたり、

聞いた内容をまとめて書いたり、ディスカッションをしたりするなど、いろいろなことが起こります。ところが、英語の授業を見ていると、読んだ後のre-telling活動はありますが、聞いた後のre-telling活動はあまりありません。聞いてすぐにre-tellingできる力を育てることは、英語だけでなく、日本語においても大事です。人の話を聞く、考えながら聞く、予想しながら聞く、反論しながら聞く、まとめながら聞く、共感しながら聞く等、いろいろな聞くが起これ、聞いた後には発信をします。これを繰り返すことで「聴き解く力」が育ち、この力を育てる音声言語としての言語教育に、もっと力を入れていくべきだと考えています(図1-8)。

今回、文部科学省国立教育政策研究所から出された「『指導と評価の一体化』のための学習評価に関する参考資料」には、いろいろな実践例が載せられています。今後は、それぞれに応じた評価のための資料の充実が望まれます。小学校における音声指導には「適切に指導する」とありますが、評価記述には「音声的特徴は評価しない」と記述されています。指導と評価の一体化であれば、評価すべきだろうと思いますが、この点について吉田先生のお考えをお聞かせください。

吉田先生：私も評価の冊子とマニュアルを見させていただきました。今回はCAN-DOをベースとしたカリキュラムになっています。CAN-DOは、自信度を測る尺度で、“Yes, I can”の答えは、生徒自身に自信があることを示します。この時、先生が生徒に対して言うのではなく、生徒自身が

図1-8



自分について“Yes, I can”と言えることが大切です。一番大切なのは、自分の英語を使う力に対してどれだけ自信をもてたかです。単語を正しく使えることは大事かもしれませんが、それ以上に、目的に応じたタスクを自分なりにできたと思える気持ち大切です。発音に関しても同様で、発音自体の評価、構造としての発音のように、細かい音声的な違いを評価することは重要ではないと思います。ただ、人とコミュニケーションをして、自分の言っていることが相手に通じなければ意味はありません。相手に通じたかどうかを確認し、通じる英語を使いながら身につけていく。そして、相手に通じた体験ができれば、その時の発音はよかったということになるので、そういう意味での発音は、タスクの達成、思考力、判断力、表現力のところで、英語が通じたという側面からの指標が必要になると思います。英語は世界でも特殊な言語で、第二言語や外国語として運用している人の数が、母語としてしている人の数の3倍近くいます。それだけに、ネイティブらしい、あるいはネイティブの英語を基準にする考え方では成り立たなくなっています。一人ひとりの人間が互いにコミュニケーションをする、そこで通じる発音、通じた英語が一番大事だと思います。

**根岸先生**：ありがとうございます。今回、吉田先生と田中先生には、「これからどのような英語教育が求められるのか」をテーマに考えていただき、お話ししていただきましたが、結果的に同じような視点が提供されていたと思いました。例えば、田中先生の「いつか、どこかでではなく、今、ここで」と吉田先生の“Fish Bowl Model”は、とても強くつながっていると思いましたし、田中先生の違いや対話の話は、吉田先生の“Open Seas Model”における“Acceptability & Diversity of values as norm”や“Tolerance of mistakes”と同じ線上にあったと思います。大切なことは変わらないのだと思いました。

コロナ禍の直前までは多かった移動が今は止まったように見えますが、幸いインターネットの状況が整っていたために、コミュニケーションは必ずしも止まっているわけではなく、むしろ活発化したかもしれません。外国からもインターネットで質問が来るようになったことを考えると、限られた人が外国語を使うのではなく、外国語を使ってできるつながりが、人生を豊かにすると考えました。第1部ではこれまでを振り返ることで、明日を考えるために大切なことや、答えへの道筋が照らされるものがたくさんあることに気づかせていただきました。明日の授業にすぐつながるものには、即効性はありませんが、その即効性はあまり長持ちしません。教材や生徒が変わった瞬間に終わってしまうことさえあります。しかし、タスク・ハンドリングという考え方をもつこと、文法や語彙という言葉とは別にresourcesという言葉で捉えておくことは非常に大切なのだと、改めて思いました。



根岸 雅史 先生

## 「つながる」英語の授業をつくる ～対面とオンラインで～



第2部：実践研究（撮影会場）

発表者：長沼 君主（東海大学）  
工藤 洋路（玉川大学）  
津久井 貴之（大妻中学高等学校）

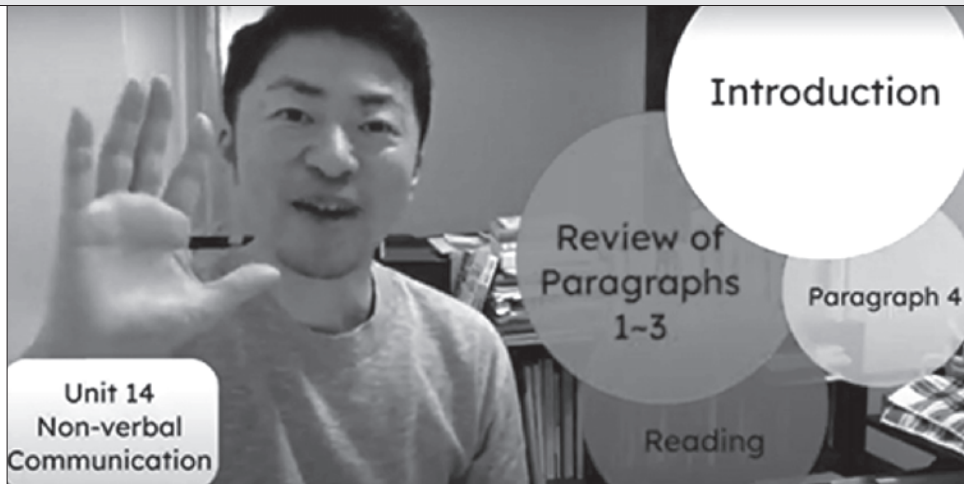
英語教育を通して身につけたい力を伸ばすために、対面とオンラインの融合を目指す指導とはどのようなものでしょうか。参加者の方々が生徒役を体験しながら、授業での教師の働きかけについて考えました。

工藤先生：第2部では、最初に私から本実践研究の背景を説明し、その後は、津久井先生による3つの授業形態（①オンデマンド型、②オンラインの同時双方向型、③対面授業）を見て体験していただきます。最後に長沼先生と私が解説をします。

コロナ禍の今年度は、対面授業の代わりとして、オンライン授業が広く行われるようになり、新しい授業形態が入ってきました。それぞれのよさがありますが、課題もあります。オンデマンド型授業で

は、その場の生徒の反応が見えない、もらえないので、やりにくさがあります。同時双方向型授業では、何時間もオンラインで授業を行っているとも目が疲れますし、慣れない機器の操作に時間がかかることもあります。対面授業が行われていても、ペアワークができず、マスクをしたままの授業では、課題や悩みがあると思います。まずは、今の状況、または2020年の4、5月頃を思い出し、悩みや課題をチャットで共有したいと思います。

## ① オンデマンド型授業 (7分)



オンデマンド型授業の一場面

## 1: 導入

キーワードを確認後、授業テーマの導入

Now we're learning about non-verbal communication associated with telling a lie. If you can see my body language very carefully, you will notice if I am telling a lie or not.

## 2: レビュー

先生が質問を交えながら、これまでの授業内容を振り返る

It's a quick review of the previous paragraphs. In those paragraphs, what did you learn about the body language associated with lying?

## 3: 授業テーマ

(1) 提示資料を使って、授業テーマを生徒と共有する

Today, I'd like to think about another reliable indication or evidence related to, associated with lying.

(2) 途中に生徒へ質問(疑問文)を多めに投げかけ、生徒を引き込む

How can you notice I am telling a lie? What is another reliable indication of telling a lie?

## 4: 言語活動

短いスピーチ(先生の好きな映画について)の中にあるウソを見抜く活動

- (1) 先生のスピーチを聞く  
字幕を使った文法内容の復習も同時に行う
- (2) 英文の黙読  
ウソを見抜く手助けとなる段落を黙読する
- (3) 再度、好きな映画についての映像部分を視聴する

先生の話のどこにウソがあるのかを見抜くために、再度リスニングを促す

Please watch the introduction of my favorite movie again. Can you indicate where I am making up a response? I mean, can you find where I am telling a lie?

(※make up a responseが英文中に出てくるため、その表現を用いて問いかけた後に、言い換えを用いて発問している)

## 5: まとめ

- (1) 活動内容の振り返りと答えの共有を行う  
Did you find where my lie was? At the end of this video, I will tell you the answer where I told a lie during the speech.
- (2) 英文理解の確認(再度の黙読を行う)  
I have a comprehension question. Just one question. Right here.(英文を提示)  
You can answer either in Japanese or in English.

**(チャットへの書き込み)**

どの発言も貴重な資料になりますね。同じような悩みや課題があることを共有でき、よかったと思いますし、このセッションを通して1つでも解決できたらいと思っています。

本実践研究では、3つの授業形態を検証するにあたり、津久井先生には同じ教材を使って実践をしてもらいます。①のオンデマンド型授業は、録画したものを見ていただき、②の同時双方向型授業は、皆さんが生徒役となり、オンラインで体験していただきます。③の対面授業は、実際に高校で行われた授業を撮影したので、その映像を見ていただきます。では、最初にオンデマンド型授業の録画を見ましょう。

(オンデマンド型授業録画視聴：P.13①)

工藤先生：ここからは、津久井先生と長沼先生に授業の振り返りのコメントをいただきます。授業者の津久井先生、いかがでしたか。

津久井先生：自分の動画ですが、改めて見ると、普段の授業に比べてゆっくり、丁寧に伝えている印象をもちました。

長沼先生：視覚情報の工夫、ジェスチャーや目線、指さしなどの工夫、テクニカルな工夫があり、うまいなと思いました。あと、いい意味での余白がありました。オンデマンドでも頭の中で生徒の声を対話させながら、授業をされているように感じましたが、新しい学校に移られ、関係性がまだできていない中で、どのような工夫をされたのかをお聞きしたいです。

津久井先生：生徒と初めて対面したのは9月でした。今回のオンデマンド授業は、生徒との関係性を築いて2か月くらいで作ったのですが、画面の向こう側にいる生徒の反応を待ちながら、授業を進めたいと思って行っていました。オンデマンドのよい点は何度も見直せるところですが、こちらのペースで進めてしまうので、なるべく“ため”(間合い)の部分を意識しました。生徒には早送りされてしまう

かもしれませんが、生徒の反応をイメージして、次の言葉を話すようにしました。生徒が自分で、“ため”をつくりながら見ることはないと思うので、そこはこちらがしっかりと意識してつくりました。

工藤先生：では、続いて同時双方向型授業を始めたいと思います。皆さんには、生徒役として実際に参加していただきます。

**②同時双方向型授業の実演(10分)****1：授業の本文を読む****2：授業テーマの振り返り****3：レビュー**

前時のオンデマンド映像で示した問いの  
答え合わせと解説

- (1) ビデオを見た後、先生のウソがどこにあったかを考える
- (2) 最初に読んだ本文に先生のウソを見抜くヒントがあることを伝える
- (3) 先生がどの部分でウソをついていたのかを伝える

**4：活動 ※英語で展開**

- (1) 投票機能を使って、回答できる質問を生徒に発信  
「コミュニケーションにおいてnon-verbalが占める割合について」
- (2) 投票状況の一次共有  
Thank you. 63%. Maybe I need to wait for a little bit longer.
- (3) チャットへの書き込みを促す質問を発信  
「どんな時にnon-verbalを用いているか」
- (4) 回答状況と回答内容の全体共有
- (5) チャットへの回答を取り上げ、先生自身の考えを伝える  
One of you says, “when I speak English, I use more non-verbal communication.”  
What do you think?

**5：回答結果とチャット内容の振り返り**

non-verbal communicationには、様々なパターンがあることを共有

工藤先生：津久井先生、ありがとうございます。

津久井先生：チャットのよさを感じましたが、そのよ



津久井 貴之 先生

さを生かしきるところまでお見せできなかったのが、これからの私のチャレンジであり、宿題です。チャットは、反応がリアルタイムに戻ってくところがいいですね。実際の授業では、生徒が発話するか、挙手をするかですが、チャットだと頭の中の考えが見えているような感覚になります。それはよい半面、授業者として一つひとつに反応してしまうと、本来進むべき、進めたいねらいとの間に差が生じるため、どう擦り合わせるかというジレンマを感じた10分間でした。

**長沼先生**：この同時双方向型授業では、つながる感覚をどうもってもらうかを意識し、投票機能やチャットを組み込みました。最初に情報理解の投票パートがあり、その後に身近な質問で引き寄せて、それをベースにしなが、オープンチャットで他の人の投稿も見える状況で意見を共有しつつ、協働的にタスクの課題を考える流れにしました。オンラインになり、授業のリアリティや自分のやりがいをもてない、教師としての自分が出せないなどの感覚をもつこともあると思いますが、津久井先生はこ

のチャットを使った授業からつながりを感じることはできましたか？

**津久井先生**：つながり過ぎる感覚もありましたが、教室には発言しづらい生徒もいることを考えると、生徒によっては積極的に自分を出せるようになる授業形態の1つといえるかもしれません。

**長沼先生**：同時双方向型授業は、チャットを見ながら反応するというマルチタスク、マルチモードのため、難しさもありますが、大変興味深かったです。

**工藤先生**：津久井先生の指示を聞きながら、チャットに書き込んでいる間に、画面には別の指示や他の人から新しいコメントが届くので、短い時間にいろいろな技能を同時に使う難しさはあります。最後に、津久井先生と生徒との対面授業を見ていきます。同じ教材、内容ですが、違うアプローチをとっていますので、見比べて、対面のインタラクションのよさを感じていただけたらと思います。

### ③対面授業(10分)

「2020年11月 高校2年生に対する授業の1コマ」のビデオ再生  
non-verbal communicationが占める割合について、ペアで考えた後、先生とのやり取りも交えながら、順に考えを発表していく授業の場面を視聴

**津久井先生**：高校2年生の習熟度別授業での標準クラスの生徒たちの様子を見ていただきましたが、改めて対面はいいなと思いました。

**長沼先生**：私も対面のよさを感じました。ビデオのテロップにありましたが、生徒のつぶやきを拾っていくのがよかったです。生徒自身がつぶやく場合もあれば、ペアや周囲の人と話をしているのを聞いた先生が拾う場合もあると思います。自然とつぶやける関係性のあるクラスの支持的な雰囲気が、授業の緊張感を解き、友だちと話しやすくするなどの効果もあると思います。そうした雰囲気は最初からあったわけではないと思います。新しい学



工藤 洋路 先生

校に移られて間がない段階から、どのようにあの雰囲気をつくり、生徒が反応してくれるようになったのかが気になりました。そこへのヒントが、オンライン授業への示唆にもなると思います。

津久井先生：依然として努力中ですが、焦らないようにしています。今回の授業は、対面授業ができるようになってから2～3か月経過した頃のもので、私は意識的に日本語で「お腹すいたな……」とか同じことを2回言うなど、人間らしい一面を生徒に見せるようにしています。また、生徒から何かつぶやきが聞こえてきたら、日本語でもいいので、必ずリアクションを返すようにしています。その積み重ねが大事だと思っています。

長沼先生：新型コロナウイルス対策で机間指導がしづらいため、生徒との間に物理的な距離ができてしまいますが、心理的距離を縮めるために、先生の姿勢を示したり、日本語でもリアクションを返したりと、信頼関係を築いているのが感じ取れました。改めてよい授業だと感じました。

工藤先生：では、津久井先生の3つの授業について振り返ります。

3つの授業をteacher talkに焦点を当てて分析すると、オンデマンド型はしっかりと準備がされており、ゆっくり意図的にポーズを入れて話すところが印象的でした。オンデマンド型授業では、聞き

図2-1

### 津久井先生の3つの授業の特徴 ～teacher talk～

オンデマンド型	<ul style="list-style-type: none"> <li>● しっかりと準備がされている印象</li> <li>● ゆっくり話し、ポーズを多めに取る</li> <li>● 単語の個々の音を省略しないで話す</li> <li>● 音を出す前に、最初の音を発音する口の形がまず作られ、間を置いてから、発話する</li> </ul>
同時双方向型	<ul style="list-style-type: none"> <li>● オンデマンド型と対面のちょうど中間の印象</li> <li>● 準備した英語を読み上げているように聞こえる部分と、その場で即興的に話しているように聞こえる部分が混在</li> </ul>
対面	<ul style="list-style-type: none"> <li>● 流暢であり、カジュアルな話し方をしている印象</li> <li>● 語末の音は消えることがある</li> </ul>

取れなかったところをもう一度戻って聞くことができますが、それでもゆっくり、丁寧に話をし、相手の反応をしっかり拾うことを意識されていました。同時双方向型は、あらかじめ準備されていた部分はゆっくり丁寧に話し、チャットの反応などを待ちながらコメントする場面は、その場で即興的に話していました。あらかじめ準備されていなかったであろうコメントが、先生から多く発せられ、準備されていたものと瞬間的に入り混ざる、同時双方向型は面白いと思いました。対面授業は、関係性ができている生徒たちなので、流暢に、カジュアルに話をしている印象がありました。授業形態ごとに適切なteacher talkのあり方も変わってくるので、それぞれの形態に合わせたトレーニングができそうです(図2-1)。

また、本文の内容は同じでも、授業アプローチはそれぞれで異なっていました。アプローチが変われば、生徒が使用する技能も変わります。オンデマンド型は、基本はリスニング技能、同時双方向型はチャットでのライティング技能、対面授業はペアで話し合う時のスピーキング技能と、同じ教材を

使っても授業展開が異なりました。それは意図的に変えたのではなく、それぞれの授業形態に最適なアプローチを考えたときに、異なる形になったということです(図2-2)。

オンデマンド型では、生徒を授業に引き込むために、生徒に考えさせる場面を意識的に多く入れていました。画面をのぞき込みながらwith……やAnd then……とポーズを入れながら話しかけ、生徒に何だろう?と考えさせる場面や“Am I telling a lie to you right now?”などの質問を多めに用い、反応を返したくなるteacher talkをたくさん入れていました。オンデマンド型は、直接その場で反応をもらえませんが、個々で反応する場面はつくれていたと思います。

同時双方向型は、生徒の反応にどう対応していくかがポイントになります。次々と届くチャットコメントの整理や反応のしかたに、教師のスキルが表れます。コメントが届いた順に、面白いものを拾っていくやり方もありますし、あらかじめ本文と関連するものを選択することもできます。行き当たりばつりの授業にならないように、視点や目的をもちな

図2-2

津久井先生の3つの授業の特徴 ～本文内容へのアプローチ～	
オンデマンド型	<ul style="list-style-type: none"> <li>● 先生が話しながら、色々なジェスチャーを使った</li> <li>● 先生の話の中のウソを見抜くという活動を行った</li> </ul>
同時双方向型	<ul style="list-style-type: none"> <li>● non-verbalが占める割合について、投票機能を使って、クラス全員の考えを集約した</li> </ul>
対面	<ul style="list-style-type: none"> <li>● ペアワークで、アイコンタクトを取らずに、picture describingを行った</li> <li>● ペアで、non-verbalが占める割合について考え、順に考えを発表した</li> </ul>

**授業形態によって、本文内容へのアプローチ方法が異なる**

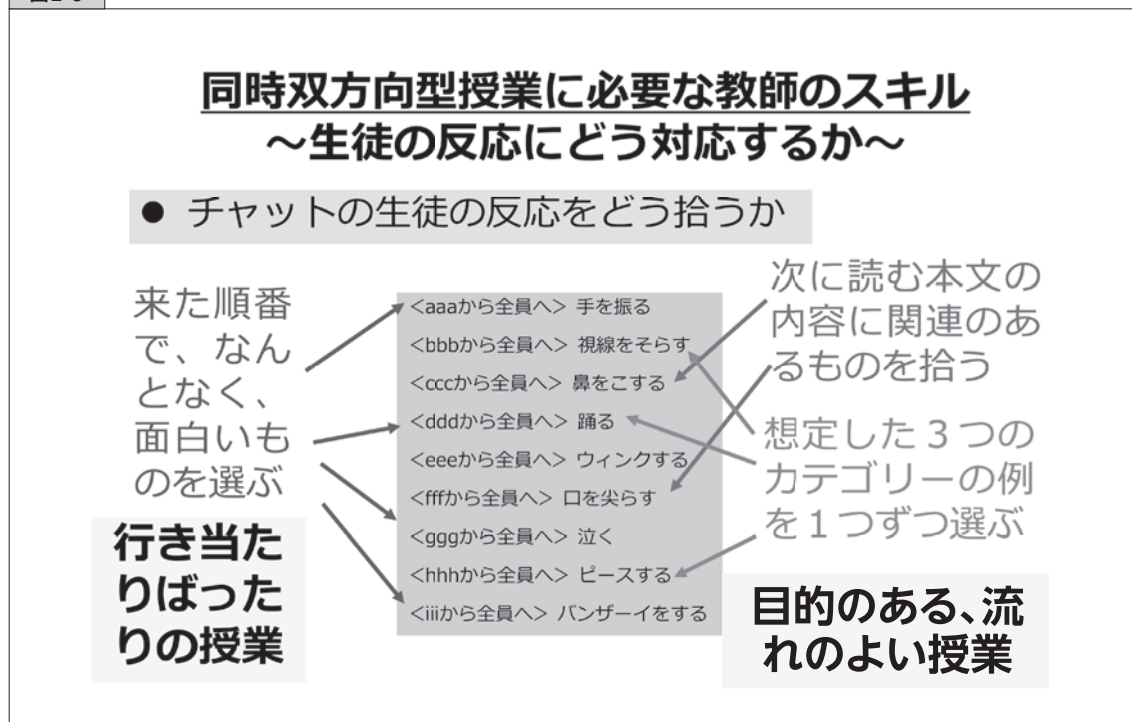
がら、流れのよい授業をつくるのが大切です(図2-3)。

ビデオ視聴をした対面授業では、non-verbal communicationが占める割合について、ペアで考えさせる場面がありました。「何パーセントだと思っ?」と繰り返し津久井先生が聞いて、各ペアが考えた回答を答えています。教室にいるほぼ全部のペアに聞く、非常に長いやり取りでした。答えが出るまで何度もいろいろなペアに聞くやり取りが、生徒に答えを早く知りたいという欲求を芽生えさせ、最後に答えを知った生徒たちが「えーっ」と驚くなど、対面ならではの環境づくり、工夫が見られました。また、生徒が言ったことに対して、先生がrecastやechoingをすることで、正しい、適切な英語に上書きされていく場面が何度かありました。上書きされた英語は、生徒たちの新たなインプットとなります。これはオンデマンド型ではできませんし、同時双方向型も全員が声を出すのは難しいため、こうした瞬間的なフィードバックは対面ならではの

と思いました。この後は長沼先生に全体的な解説をしていただきます。

長沼先生：今日の3つの授業を「対面」から「遠隔」の順に並べて振り返ると、用語は少し違いますが、①対面型授業から、遠隔授業の②同期型(オンライン)、③非同期型(オンデマンド)の順に、双方向型から一方向型へと整理できます(図2-4)。しかし、本当にそうなのでしょか。オンデマンド型でも教師からかなりの語りかけがあり、教師と生徒の内面での対話が起こっていました。オンラインの同時双方向型授業では、チャットのコメントへの教師からの反応や質問の投げかけに応じてさらにコメントをするなど、教師の働きかけを介して生徒同士の対話が生まれている様子が見えがえました。図2-4の下の①の図は対面型授業を想定していますが、対面でも教師主導型で一方向であることがあります。本質的な学びのためには、どの場面においても教師の語りかけによるインタラクションの促しが必要となります。双方向性を担保するた

図2-3







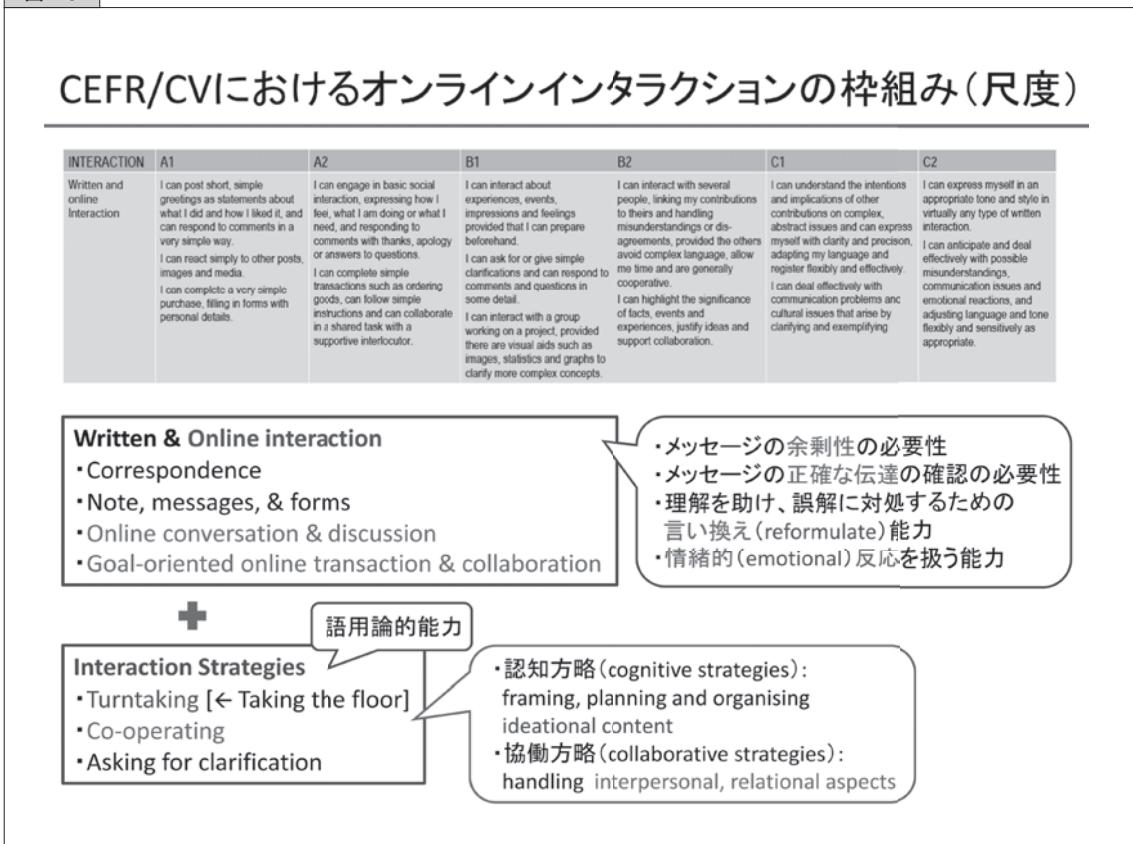
長沼 君主 先生

した余剰性を意識する必要があるということだと思えます。また、口頭の場合は、その場で理解確認やエラー訂正などができますが、書き言葉だと伝わったつもりになり、また、やり取りの時差からタイミングを逸することもあるので、きちんと伝わっているかを確認する必要があることにも触れられています(図2-5)。

今年度から教科化された小学校の英語教育では、対話の継続につながるスモールトークが重視されており、中学校の移行教材等でも推奨されています。オンライン授業においても、対話を続けるように努めることが重要です。それぞれが答えて終わるのではなく、コメントを取り上げてフォローアップの反応をし、さらに質問や発言をしながら、会話を続けていく談話的能力や方略を、改めて考える必要があると思えます。

最後に遠隔授業と対面型の授業を組み合わせ

図2-5



た授業ですが、遠隔授業の取り入れで反転学習的な学びが扱いやすくなり、通常の対面的な学びの活性化をもたらす可能性が広がったと思います。また、遠隔授業では、遠隔だからこそ人とつながりたいという気持ちが生まれているように思います。小学校でも、遠隔授業から対面授業になった時、オンデマンド型授業で積み上がった気持ちが、対面授業の参加度を高めたという話を聞きました。相手意識を高めることがコミュニケーションの本質であり、対面授業に残るものが何かを問うことが、学びの定着や自律的学習につながると思います。遠隔授業への対応から1年が経とうとしている今、遠隔的な学びと対面的な学びを組み合わせた新しい価値観が生まれています。新しい学びの姿や質の保証を、また一緒に考えていけたらと思っています。

**事務局:** 本日のまとめを吉田先生からお願いします。

**吉田先生:** 実践的、具体的な提案がなされていて、非常に有益な内容でした。第1部から実践パートに至るまで、何のために言葉を学ぶのかという原点が貫かれていました。津久井先生は3つの授業を実践されましたが、素晴らしかったです。対面授業は生徒へのフィードバックがすぐにでき

ますが、これはわれわれが目指しているコミュニケーションの原型だと思います。

今年は私も、授業用に20~30本のオンデマンド映像を作りました。反転授業のように生徒には授業前に見てもらい、双方向型のオンライン授業で内容について詳しく触れて、グループワークやディスカッションにつなげています。オンライン授業中は、ディスカッションの中に私も入り、質問を受けたり、答えたりすることもあります。これまでは、40人の生徒がいる授業で、個々のディスカッションに入ることは難しかったのですが、オンラインでは可能になりました。ディスカッション後は、全体的な質問を受けたり、reaction paperを書かせたりして、次の授業で私なりの答えを発表しています。私からの答えは、授業前に学生がすべてを見られるように、共有場所であらかじめ公開をしています。このようなことは、対面授業ではほとんどできませんでしたが、それが可能になりました。こうした時代となり、オンライン、オンデマンドのよさを意味づけながら、全体的、総合的に英語の授業をよりよいものに発展させていくことが必要になっていきます。工夫をしなければなりません、そういう時代に突入したのだと思います。



第2部：実践研究（撮影会場）

## ARCLE理事・研究員からのメッセージ シンポジウムを終えて

吉田 研作 (上智大学)

今回のシンポジウムはコロナ禍という異常事態の中で、オンライン形式で実施された。結果的には、全国各地のみならず、海外からも参加者がいて、例年とは一味違ったシンポジウムになった。しかし、どのような環境であろうと、日本の英語教育が目指すべき目標は変わらない。田中先生と私の発表は、まさにその点を強調したものだと思う。対面にせよ、オンラインにせよ、今までと異なる工夫をしなければならないが、それは、具体的な教え方の問題であり、決して本質的な英語教育の目的や目標の問題ではない。津久井先生の3通りの授業の実施形態も、決して英語教育の本質が変わるのではないことを示していた。来年度、たとえ授業が対面に戻ったとしても、コロナ禍前の状態に戻るわけではない。この1年、様々な形で経験してきた新たな英語教育のあり方は、必ず今後の日本の英語教育に影響を与えるだろう。そして、ますます大海に向けた英語教育が広がることを期待する。

田中 茂範 (PEN言語教育サービス)

英語教育の歴史を回想すれば、「Aが変わればBが変わる(はずだ)」という議論がずっと行われてきたように思います。Aにあたるのは「教科書」「入試」「指導法」「評価法」「教師」などで、Bにあたるのは「英語教育(の成果)」です。英語が国際共通語となった今、英語教育は、生徒一人ひとりの中に息づくMy Englishを育てる教育を行う必要があります。そのためには、教師が変わることが課題になってきます。慣れ親しんだやり方を変えるということです。教師として変わる際のベクトルはいくつかありますが、個人的には「文法指導」のあり方だろうと思っています。文法のない言語はありません。どの英文を見ても、文法の血が流れています。しかし、ここでいう文法は、文を分解し、解説するためのものであってはなりません。表現を自在に紡ぎ出すための文法、すなわち、「表現英文法」でなければなりません。2022年度から使用される高等学校の英語の教科書では、文法の取り扱いが明らかに変わります。タスクの中に文法を位置づけることが求められるようになります。文法指導のあり方を変えることは、シンボリックな意味で英語教育の改革に大きなインパクトを与えると思っています。

根岸 雅史 (東京外国語大学)

初めてのオンライン・シンポジウムは、準備段階では不安もありましたが、無事終えてほっとしています。アンケート結果を見ると、参加者の多くの方がこのオンラインの形式に満足されたことが分かります。第1部の田中先生のお話は、これまでの長年の研究のエッセンスが入ったものでした。「いつか、どこかで」ではなく「今、ここで」や「しなやかに」といった「大和ことば」のメッセージ性の力強さを感じました。また、吉田先生の金魚鉢モデルは、田中先生の「いつか、どこかで」ではなく「今、ここで」の延長線上にあることを再認識しました。第2部の津久井先生の授業は非常に興味深いものでした。オンデマンド型授業・オンライン同時双方向型授業・対面授業はよく比較されますが、同じ授業者が同じ教材で実践したことは私は見たことがありませんでした。これは授業者が津久井先生という優れた実践者であったことを差し引いても、今後の実践の大きなヒントになったことと思います。

#### アレン玉井 光江 (青山学院大学)

今回は異例のオンラインでのシンポジウムでしたが、私は田中先生のご講演についてコメント及び質問をする役割をいただいております。田中先生は、今こそ言葉の力、及びコミュニケーションの力が必要であることを説かれ、ECF(English Curriculum Framework)が提案する英語コミュニケーション能力について語られました。今までもお話をお聞きし、勉強しておりましたが、改めてECFを深く理解することができました。私からは、人の力の源に言葉が存在していることを共有させていただき、この不確実な世界を生き抜く子どもたちのために行われているEducation 2030プロジェクトをご紹介します。

通常とは異なる形態でのシンポジウムでしたが、先生方のご発表から「これから求められる英語教育」について多くのことを学ぶことができ、とても充実したものでした。参加できたことをうれしく、また光栄に思っております。

#### 金森 強 (文教大学)

今回のシンポジウム、全国のような地域から多くの方の参加があったと聞いています。年の瀬の大変お忙しい時期に英語教育について考える時間をもていただいたことをうれしく思います。これまでとは趣が異なるリモートでの開催、実施にあたっては、相当の準備とご苦労があったはずですが、企画・運営をくださったARCLE事務局の皆さん、本当にありがとうございました。

今回のシンポジウムでは、第1部の田中先生、吉田先生のお話から、これからの英語教育を考える時、何が大切なのか、そして、どこに向かって進むべきなのかについて、再度確認する機会とすることができました。また、第2部の実践的な取り組みの紹介では、今後の英語授業への多様な視点からのアプローチに加え、現場教員一人ひとりの主体的な取り組みへの期待と可能性を感じることができました。Covid-19が猛威を振るい、いろいろな面で思うようにならない日々を送ってきた1年でしたが、1年の最後に、大変貴重で心が高揚する時間をもつことができました。本当に大変な1年でしたが、現場の先生方のご苦労は子どもたちの成長の確実な支えになっているはずですが、最後に、これまでARCLEを牽引してくださった田中先生、吉田先生に心より感謝の意を表したいと思います。ありがとうございました。

#### 長沼 君主 (東海大学)

対面型と遠隔型の学びの差は何であろうか。急速な遠隔型の授業の取り入れが求められるようになる中、対面での双方向的な学びの代替としての遠隔による一方向的な学びとの位置づけが、ともするとなされているように見える。対面でも遠隔でも本質的な学びとして、教師の語りかけにより、オンラインチャットやリアクションペーパー等も含む、インタラクションを促し、教師や生徒の内面での対話を引き起こす意味においては、学びにおける姿は変わらないだろう。近年出されたCEFR/CV(Companion Volume)では、Online & Written Interactionの領域が新たに設けられたが、書き言葉によるインタラクションの発達をより積極的に扱うことで、可能性が広がるだろう。遠隔での反転学習的な学びによる対面授業の活性化や、遠隔学習だからこその人とつながりたいとの気持ちを起こし、コミュニケーションを動機づけ、相手意識を高めるための工夫、さらには、対面授業に残るものが何かを問うことによる学びの定着や自律的学習と自立的使用への深い問いかけなど、代替ではない、遠隔を交えた授業における新しい学びの姿と質保証を考えていきたい。

## 参加者の声

# 「心に残った気づきや学び・これから取り組みたいこと」

～参加者アンケートから～

### 小学校教師

- ◎講義を聞き、実践授業に参加して、学習者は表現者であり、指導者は学習者の実践のためにファシリテーター、プロデューサー、自身がよきコミュニケーターであるべきだと思いました。明日からの子どもたちとの対面授業で、意識して実践していきたいと思います。
- ◎使える英語、通じる英語を教えていきたいです。そのためには日本語と英語との言語認知の違いや音声の違いなどを、英語(外国語)教育者が理解することが必要だと思いました。

### 中学校教師・中高一貫校教師

- ◎New Normalな英語教育において「教師がどのような力を身につけるべきか」という問いに対して、ある目的に向かって全員で協働的に解決していくプロジェクト型の授業を展開し、リサーチ・ディスカッション・プレゼンテーションする力をつけさせることが大事であると感じました。

### 高校教師

- ◎「言葉はコミュニケーションのツールである」。これを肝に銘じて、社会に貢献しようとする生徒を育成したいと思います。
- ◎同じ題材を用いたオンデマンド授業や同時双方向オンライン授業や対面授業について、授業者としての違い、生徒としての違いなどを実際に体験して確認することができました。
- ◎先生方の実践を拝見し、オンライン授業が、必ずしも対面授業に比べて劣っているものではないことに気づきました。
- ◎「生徒のつぶやきを拾う」。そのためには「生徒がつぶやいてくれる支持的な風土」を教室につくっていきたくと本気で考えました。言葉を紡ぐことは、人間関係を紡ぐこと、「紡いだ」キャンパス地の上に生徒たちが思いきり自己表現の絵画を描けるように支援したいと思います。

### 教育行政関係者・研究者・大学教員

- ◎これまでは限定された世界でのつながりだったものが、コロナ禍とデジタルテクノロジーの進化により、一気にバリアフリーにつながる事ができる世の中になりました。そのような社会を生きていく子どもたちと、人とのコミュニケーションやつながりについて、共に考えていきたいです。
- ◎オンデマンド、オンライン、対面での指導方法の違いと、teacher talkの使い方が参考になりました。特にteacher talkについて、自分なりに変化を加えてみたいと思いました。

### 学生

- ◎これからの英語教育は、学習者自身が表現者になるということを知り、自分の英語を使って、自信をもって話そうということを、将来は指導していきたいと思いました。
- ◎オンライン授業は一方向的、対面授業は双方向的という固定概念が、自分の中に形成されていたことに気づくことができました。授業方法によっては、どのようなプラットフォームを用いても、双方向の授業にも一方向的な授業にもできるということが一番の学びです。

### 民間企業

- ◎教科としての英語ではなく、言語としての英語を子どもたちに伝えることが私たちにできることであり、この先もどんな方法・媒体であっても変わらないことだと感じました。
- ◎このような状況になったからこそ、改めて何をどう使って、世界の人とつながるコミュニケーションツールとしての英語の学びを子どもたちに提供していくかを考える機会になりました。
- ◎コロナ禍で対面でのやり取りが制限される中、やり取りの活動は難しいと決めつけていました。しかし、対話する力はこれからの時代に必ず必要であること、そして対面における口頭でのやり取りにこだわらなくても、対話する力を伸ばす方法はあるということを知りました。

ARCLE Webサイトのご案内



<http://www.arcle.jp/>

ARCLEでの研究活動（イベント情報を含む）・コラム・刊行物などを定期的に発信しています。  
本冊子もダウンロードできます。

ARCLE®

SYMPOSIUM REPORT  
2020

〈概要〉

研究理事  
(五十音順) アレン玉井光江(青山学院大学)  
金森強(文教大学)  
田中茂範(PEN言語教育サービス)  
根岸雅史(東京外国語大学)  
吉田研作(上智大学)\*研究理事代表

研究員 長沼君主(東海大学)

小野塚若菜(ベネッセ教育総合研究所)  
加藤由美子(ベネッセ教育総合研究所)  
杉田美穂(ベネッセ教育総合研究所)  
福本優美子(ベネッセ教育総合研究所)  
森下みゆき(ベネッセ教育総合研究所)  
渡邊直人(ベネッセ教育総合研究所)

正式名称 Action Research Center for Language Education (ARCLE/アークル)  
\*ARCLEはベネッセ教育総合研究所が運営する英語教育研究会です。

事務局 〒206-8686 東京都多摩市落合1-34 ベネッセ教育総合研究所 内

上智大学・ベネッセ英語教育シンポジウム報告書 2021年3月10日発行

企画・発行: Action Research Center for Language Education (ARCLE/アークル)

編集協力: 水田真貴 デザイン: MONDO graphic

ARCS20

©Benesse Corporation. All Rights Reserved.